

CHT Newsletter

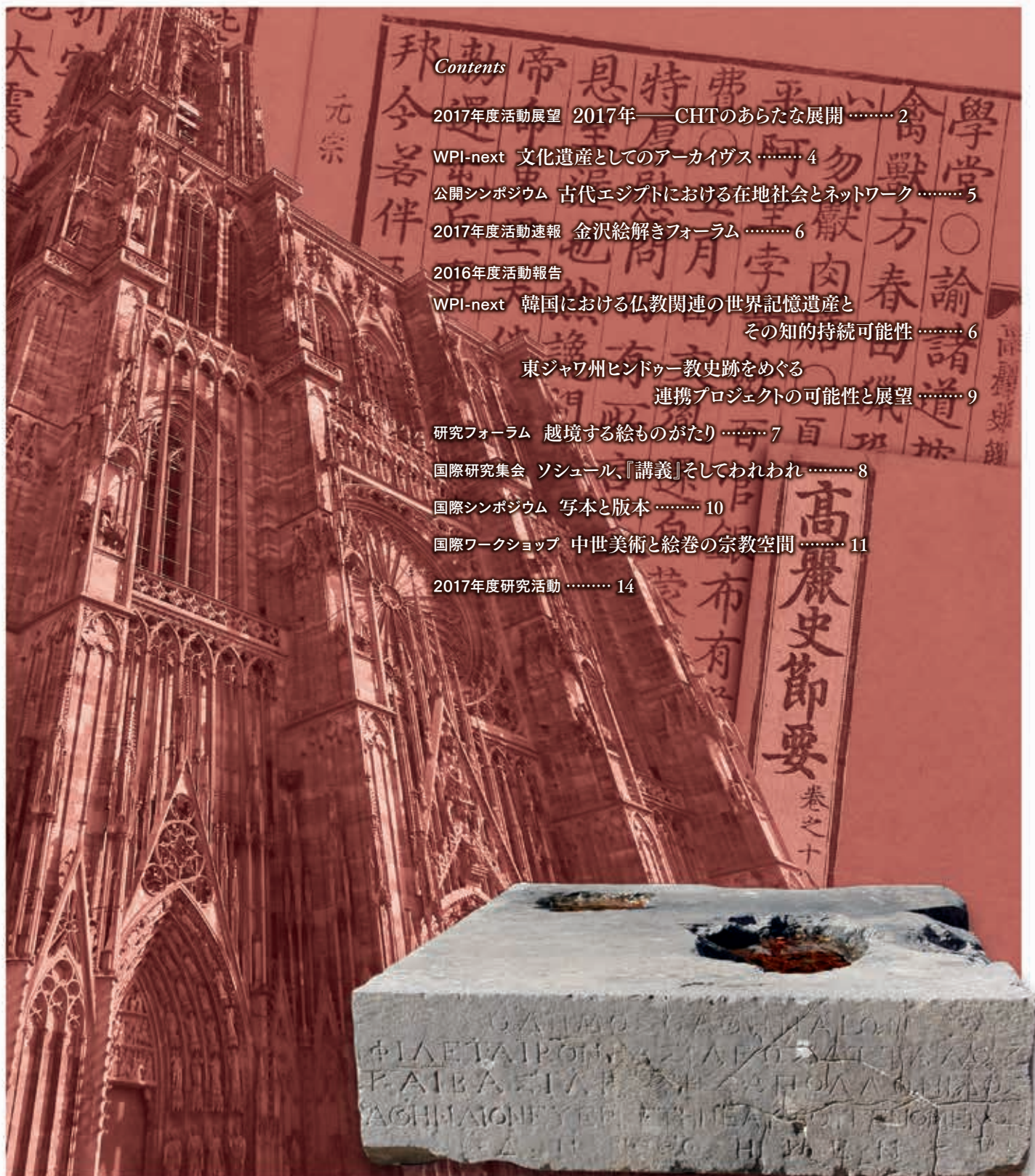
Research Center for Cultural Heritage and Texts



名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター

Contents

- 2017年度活動展望 2017年——CHTのあらたな展開 …… 2
- WPI-next 文化遺産としてのアーカイヴス …… 4
- 公開シンポジウム 古代エジプトにおける在地社会とネットワーク …… 5
- 2017年度活動速報 金沢絵解きフォーラム …… 6
- 2016年度活動報告
- WPI-next 韓国における仏教関連の世界記憶遺産と
その知的持続可能性 …… 6
- 東ジャワ州ヒンドゥー教史跡をめぐる
連携プロジェクトの可能性と展望 …… 9
- 研究フォーラム 越境する絵ものがたり …… 7
- 国際研究集会 ソシユール、『講義』そしてわれわれ …… 8
- 国際シンポジウム 写本と版本 …… 10
- 国際ワークショップ 中世美術と絵巻の宗教空間 …… 11
- 2017年度研究活動 …… 14



2017年——CHTのあらたな展開

阿部 泰郎

名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター長・教授

○ 二つの国際プロジェクトの提案と発進

CHTが発足し、本格的な活動を始めて三年目にあたる2017年は、我々にとって大きな飛躍の時となった。アーカイブス部門は、阿部が研究代表者をつとめる基盤研究(S)「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究—人文学アーカイブス・ネットワークの構築」が三年を経て成果進捗評価を受けており、物質文化部門の周藤教授を代表者とする基盤研究(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」も二年目に至り、更に活発な研究活動を推進している。学内の競争的研究では、WPI-next(最先端国際研究ユニット)「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」が最終年度を迎え、次の段階でのより本格的な人文学の先端研究を国際的に展開すべき時期に至った。

人類の共有する文化遺産は、文学・思想・宗教にわたる文献学の、母胎かつ実践でもあるアーカイブスを基盤とし、史料・遺物のマテリアリティに立脚する歴史・考古学と、視覚イメージを媒ちとする美術・図像学などにより、ようやく全体を捉えることができる複合的な存在である。他方で、その意義や位置については、歴史的かつ社会的な動きの中で絶えず解釈され意味を与え続けられる対象でもある。とりわけ宗教に関わる遺産は、最も偉大な達成を示すと同時に紛争や破壊の標的ともなり、現在の社会にあって一層の危機に瀕している。こうしたことから、文化遺産はすぐれて今日的な課題を持つ研究対象であるといえるだろう。

CHTでは、これまでに培った諸分野にまたがる国内外の研究者との協働と、その過程で協力関係を構築した諸機関とのより本格的な研究連携を目指し、新たに文化遺産についての社会実践として取り組む研究プロジェクトを、JSPSの公募に応じて、阿部を研究代表として提案し、採択された。ひとつは、研究拠点形成事業 Core-to-Core Program「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」(2017~2021)、もうひとつは、グローバル展開プログラム(課題設定型)「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」(2017~2019)であり、いずれも国際研究事業である。

○ 二方向からの文化遺産探究

両プログラムの研究対象は、日本と世界にわたる多様な文化遺産である。一方は、宗教の生みだした聖典から遺産・遺物・祭儀など諸位相にわたり、また一方は、日本を代表する文化遺産としての絵巻や絵本、そして絵解きに及ぶ「絵

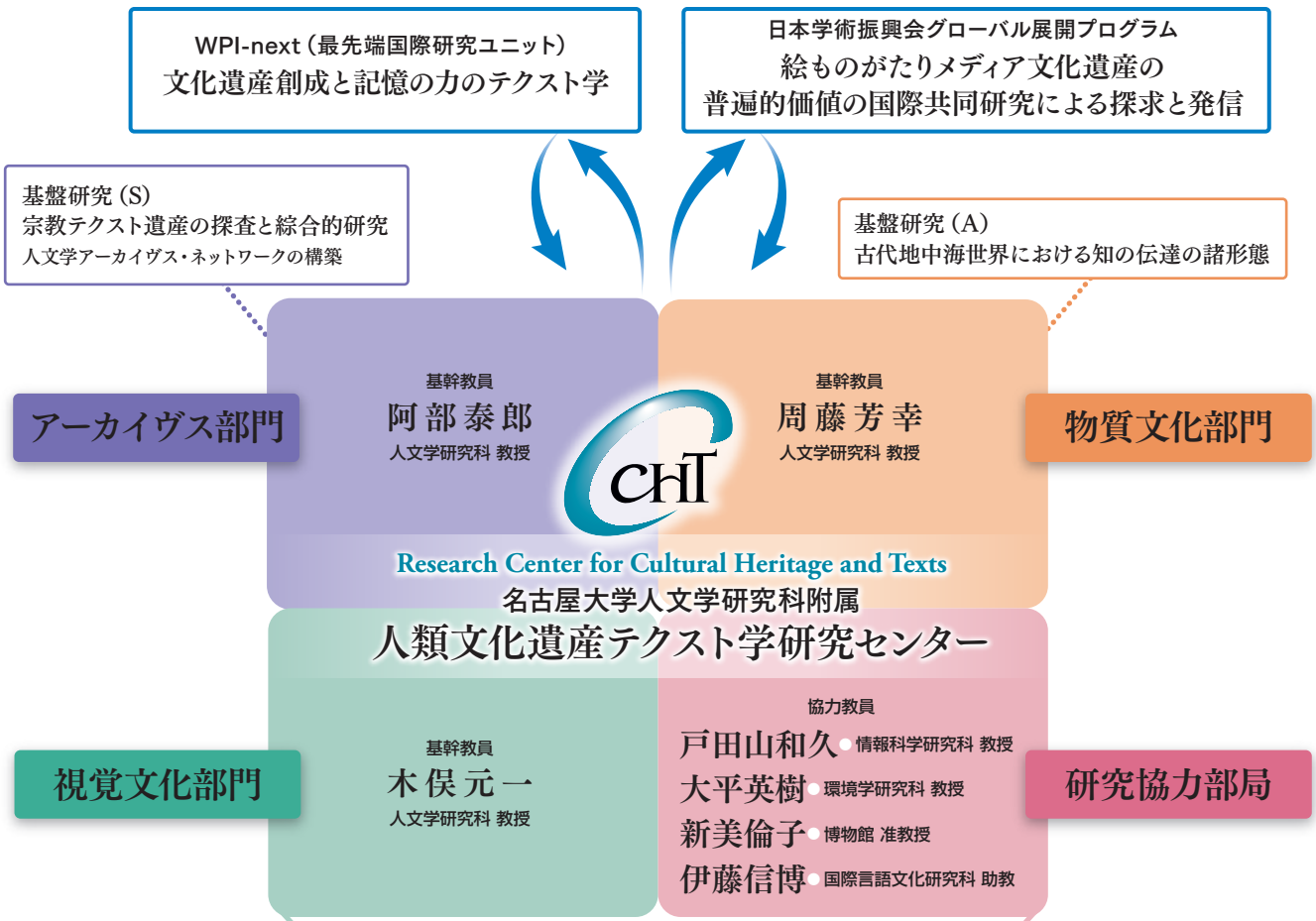
ものがたり」の世界である。それぞれに焦点化された文化遺産の領域は、いずれもすぐれて豊かなテキストの運動を現象する。また多様な解釈の対象としての歴史・文化的記憶が、蓄えられ、あるいは変容し、あらたな意味を与えられ、また相克し忘却されていく運動をうながす存在である。これらを、人文学の基幹かつ最先端の実験であるテキスト学の方法論によって解説し、絶えず解釈する試みに生かさなくてはならない。そうすることで、常に己れの意味の解明を求め続け新たな知をもたらし続ける文化遺産は、過去の遺物ではなく、人間文化の未来にとって欠かすことのできない、まさしく人類にとっての遺産となるだろう。

○ 三つの海外研究拠点との連携

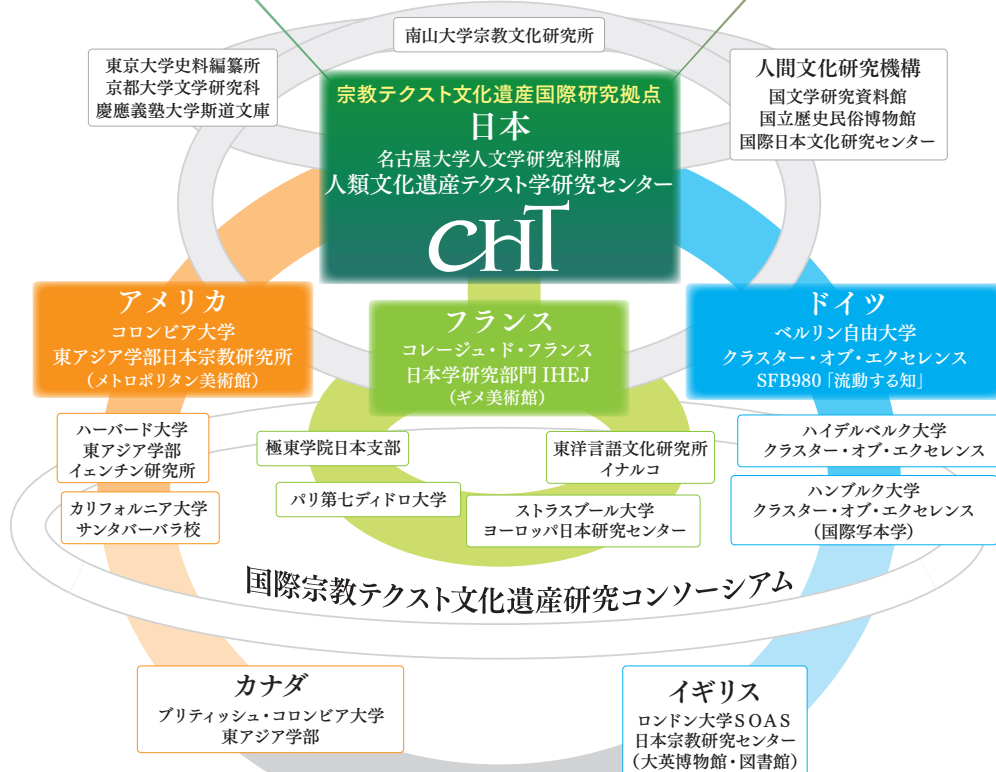
この二つの国際共同研究プロジェクト、とくに Core-to-Core Program は、CHTと、アメリカ・フランス・ドイツの三箇国における、人文学における最先端研究を^{リード}する大学の研究機関・グループとの、相互の研究拠点形成を目指している。宗教文化遺産については、コロンビア大学、コレッジ・ド・フランス、ベルリン自由大学の三大学と協定を結び、それぞれに特色を生かした共同研究を立ち上げて、そこに各国の複数の主要大学との、ワークショップ等による研究交流を組み合わせている。国内では、東京大学、京都大学、慶應義塾大学をはじめとして、人間文化研究機構と連携した各種研究事業を行う。また、南山大学との「宗教文化セミナー」も共同開催する。「絵ものがたり」プロジェクトでは、海外に所蔵される日本の絵巻・絵本等の共同調査研究を中心として、ハーバード大学、イナルコ、ハイデルベルク大学の美術史研究者と日本の文化・美術史研究者が、分野融合的な研究活動を行う。その過程で、あらたな絵ものがたり資料の文化遺産としての価値を発見し、最新のデジタル技術を活用した日本文化のメディア・コンテンツを創造し、その普遍的価値の発信をはかる。いずれのプロジェクトも、国内外の大学院生や若手研究者に積極的に参画してもらうことにより、将来の人文学を担う人材を育成することも大きな使命である。

二つの研究プロジェクトの活動は、本ニューズレターにその一端を紹介したように、既にその発進初年度においてさまざまに国際研究活動を展開している。それらの成果は、互いに有機的に結びつきながら、着実に未来の人文学を創りあげていく契機となるだろう。

本センターがそのプラットフォームとなることが、今こそ求められている。



日本学術振興会研究拠点形成事業 ● Core-to-Core Program
 テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築



文化遺産としてのアーカイヴス

Archives as Cultural Heritage

2017年6月2日 開催地 オーストリア・科学アカデミーアジア文化・思想史研究所

2017年6月2日、オーストリア・ウィーン市にあるオーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所 (Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Österreichischen Akademie der Wissenschaften) にて、国際ワークショップ「文化遺産としてのアーカイヴス」が開催された。

アーカイヴスは、人類にとって未来を創造するために不可欠な資産である。他方で、文化遺産は、アーカイヴス化されることによって文化遺産としての価値が認知され、また新たに創出されるという側面を備えている。人文学が扱う資料には、新たに発掘された資料のほか、従来一部の人々のみがその存在を知るものや、公開が制限されて一部の人々のみに利用が限定されていた資料もある。近年、それらの資料がアーカイヴス化され、デジタル化されて一般公開されることで、多くの人々の目に触れる可能性も広がってきた。しかし、アーカイヴス化に至る資料整理、デジタル化やデータベース化、それらの管理にあたっては、専門的な技術や知識が不可欠である。また、デジタル化された資料の公開や共有については、ガイドラインの作成も欠かせない。ただし、資料整理やデジタル化、データベース化は、統一フォーマットやプラットフォームが整っているわけではなく、現状は個々の研究者が独自に行うという状況にある。こうした課題は、文書や歴史記録などを扱う人文・社会科学全体において共通するものであり、今後、学問分野の垣根を越えて国際的に議論していく必要がある。

こうしたなかで、本ワークショップでは文書（文字テキスト）、絵巻・宗教画（図像テキスト）、民族資料をはじめとする物質資料（物質テキスト）などを含む、多様な資料の活用方法やデジタル化を含むアーカイヴス化、それらの資料群を文化遺産として継承していくための方途について議論することをねらいとした。そこで発表者として、宗教学、神道史学、文献学、文化人類学などを専門とする研究者を、日本から5名、オーストリアから3名迎え、中世・近世の日本と



ヨーロッパ、さらにはエチオピアといった広範な時代・地域に関する多様な資料のアーカイヴスを事例として多角的な議論を行った。

2017年6月3日は、ウィーンの森の南西部に位置するハイリゲンクロイツを訪れて、1133年にバーベンベルク家のレオポルト3世によって創立されたハイリゲンクロイツ修道院を見学した。同修道院は、創立当初から現在まで絶えることなく続くシトー派修道院としては世界最古とされるとともに、ヨーロッパにおけるシトー派修道会では最大規模とされる。こうしたなかで、同修道院のアーカイヴス室で資料を閲覧し、それらの資料の特徴や管理・継承方法について、同修道院の修道士でありワークショップの発表者の1人でもあるマーティン・ローランド (Martin Roland) 氏に解説していただいた。修道院における宗教テキスト遺産のアーカイヴスとその現状に関する新たな知見を獲得する、非常に貴重な機会となった。

今回のワークショップの開催にあたっては、オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所のベルンハルト・シャイド氏に多大なご協力をいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げたい。

なお、本ワークショップはJSPS 研究拠点形成事業 Core-to-Core Program 「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」の資金によって開催されたものである。(吉田早悠里 南山大学国際教養学部准教授)



公開シンポジウム

古代エジプトにおける在地社会とネットワーク

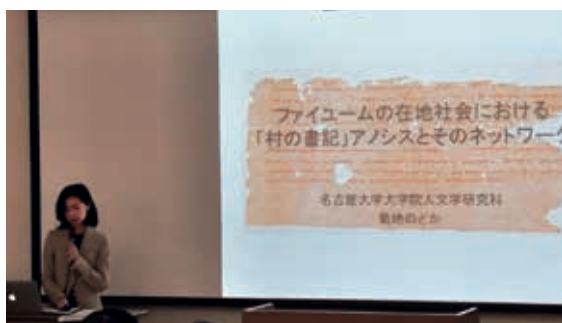
Local Society and Network in Ancient Egypt

2017年4月22日 名古屋大学文学部棟 127講義室

古代エジプト文明の繁栄が、ナイルによって潤された肥沃な領域部における豊かな経済活動と、それを基盤として展開された高度かつ複雑な精神文化によって支えられていたことは、周知の事実である。しかし、人々の活動の拠点であった在地社会の様相、とりわけ在地社会を構成する人々の具体的なつながりのあり方については、依然として不明な点が少なくない。

人類文化遺産テキスト学研究センターでは、2015年11月25日に国際的に活躍するアメリカ及びドイツのパピルス研究者を招聘して、国際ワークショップ「末期王朝・プトレマイオス朝エジプトにおけるテキストと社会」を開催したが（CHT ニュースレターNo.2、8頁）、2017年4月22日には、CHT 物質文化部門における中軸的な活動の一つである中エジプトのアコリス遺跡調査の関係者を中心に、古代エジプト在地社会とそのネットワークについて、公開シンポジウムを開催した。

在地社会に生きる人々が、家族や親族集団はもちろんのこと、宗教的な団体（いわゆる神殿）、軍隊組織、徴税単位など、社会の様々な局面におけるネットワークを構成していたことは言うまでもない。しかし、そのようなネットワークを介したつながりは、いかなる制度や慣習によって支えられていたのだろうか。また、ヘレニズム時代に顕著に見られる外来文化との接触やその在地社会への浸透にあたって、これらのネットワークは、どのような役割を果たしていたのだろうか。このシンポジウムでは、ヘレニズム時代のパピルス文書から得られる知見と、アコリスをはじめとするエジプトの諸遺跡から得られている物質文化に関する知見とを総合することにより、これらの在地社会におけるネットワークをめぐる諸問題を学際的な視点から検討することを目的として行われた。



シンポジウムでは、周藤芳幸（名古屋大学）による問題提起をうけて、はじめに竹尾美里（中京大学）が「西洋古代史研究とネットワーク理論」と題して、ネットワーク理論の基本的な文献とそこで使用される概念やタームを提示するとともに、近年の古代ギリシア史研究におけるその具体的な応用例を紹介した。ついで、平野みか（名古屋大学大学院）は、「ヘレニズム時代以前の異文化との接触」において、エジプトのアマルナ遺跡から出土しているミケーネ土器を検討した。続いて、菊地のほか（同）は、「ファイユームの在地社会における「村の書記」アノシスとそのネットワーク」と題して、前3世紀のファイユームにおいて、エジプト人である「村の書記」アノシスが、入植してきたギリシア人と在地エジプト人とのネットワーク・ハブとして機能していた様子を、パピルス史料から鮮やかに描き出した。また、石田真衣（日本学術振興会特別研究員）は、「プトレマイオス朝期エジプトの嘆願と紛争処理」において、在地社会における紛争処理に果たした人的ネットワークの役割を論じた。

物質文化に着目する後半では、オベリスクの制作技術に関する西本真一（日本工業大学）の「アコリスの石切場調査と第一アナスタシ・パピルス」に続いて、和田浩一郎（國學院大學）が「王朝時代の集落内埋葬について」において、王朝時代の集落内埋葬と埋葬観念との関係を論じた。最後に、花坂哲（古代オリエント博物館）が、「サンダルからクツへ」と題する報告において、皮革製履物の形態変化に現れる外国からの影響を豊富な資料に基づいて検討した。

本シンポジウムでは、前期課程の大学院生から日本を代表するエジプト学者にいたるまで、幅広い年齢層の研究者がネットワークを鍵概念として有益な意見を交わすことで、本年10月に予定されている研究拠点形成事業によるワークショップの土台を築くことができた。

（周藤芳幸 人文学研究科教授）

特別講演会 | WPI-next ● 文化遺産創成と記憶の力のテキスト学

韓国における仏教関連の世界記憶遺産とその知的持続可能性

2016年7月18日 名古屋大学文学部棟 大会議室

金鐘明キムジョンミョン氏は韓国の韓国学中央研究院教授で、国際的な見地から韓国の文化と社会について研究を行っている。世界の文化遺産と日本の文化遺産創成およびそのアーカイブス化を巡る総合的な比較検討と方法論の探究を目指す、名古屋大学 WPI-next（最先端国際研究ユニット）「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」（代表：阿部泰郎）の活動の一環として金氏を招聘し、韓国における文化遺産の現状について講演をしていただいた。

まず、2016年時点で韓国は44件の世界遺産を有しているが、そのうち6件が仏教関連の遺産であること、また国宝の半分以上が仏教文化遺産であることを示された。その一方で、それらの文化遺産に対する研究が進んでいない状況とその理由を分析することで、今後の持続可能性および課題についての考察を加えられた。

具体的には、『高麗大藏経』と『直指』を具体例として説明を進められた。漢文に訳された仏教経典を結集した大藏経は、その木版本が中国・朝鮮半島・日本で制作されたが、なかでも『高麗大藏経』は精巧な校正と編纂に基づく誤りの少ない善本とされ、また現在もその版木が海印寺（慶尚道）に遺されていることでも注目されている。『直指』は白雲和尚が編纂した禅籍であり、世界最古の金属活字印刷本として知られている。

講演では、これらの文化遺産についての研究は書誌的なものが多く、内容や思想の検討にまで及ぶものが少ないことを指摘された。また、たとえば高麗大藏経研究所によ



て『高麗大藏経』のデジタル化と公開が進められているが、写真が未公開となっていることやブラウザが制限されていることなど今後の改善点も多く残されていることを述べられた。さらに、このような諸問題に対応することが求められているにも関わらず、実はそれらの活動は民間団体もしくは地方自治体によって運営されているため慢性的な財政難の状態にあり、その点で今後の持続可能性について疑問符がつくと指摘された。

講演後には、日本古写経の調査と研究を積極的に推進されている落合俊典氏（国際仏教学大学院大学）や日韓宗教テキスト遺産共同ワークショップ（CHT ニュースレター No.2参照）のために来名していた韓国研究機関の研究者の間で意見交換が行われた。日韓における仏教文化遺産の研究状況や公開の現状についての情報と問題意識を共有することができるよい機会となった。

（三好俊徳 人文学研究科研究員）

2017年度活動速報 | 共同研究協定 ● 金沢大学 CCRS・名古屋大学 CHT 研究連携協定締結記念

金沢絵解きフォーラム——北陸の絵解き文化を探る

2017年7月21日 金沢大学 サテライト・プラザ

名古屋大学 CHT は、同大学が十年間継続してきた、富山県南砺市城端別院善徳寺の虫干法会むしぼしほうえにおける聖徳太子絵伝の絵解きを始めとする文化遺産の実践的研究活動を、金沢大学の国際文化資源学研究中心（CCRS）と協同して展開するための研究連携協定を締結した。本フォーラムはその記念として、金沢大学サテライトプラザにおいて開催された。

第一部は、「北陸の絵解き文化を探る」をテーマとして、CHT センター長の阿部の司会により、金沢大学 CCRS センター長の森雅秀教授による「アジア仏教美術のなかの絵

解き文化」、北陸大学の福江充教授による「立山信仰と立山曼荼羅の絵解き」の二つの講演が行われた。第二部は、隣接する金沢市文化施設の松向庵（旧園邸）に場を移し、砺波と城端別院の絵解きを含む宗教文化について、城端別院元輪番代行の大村忍師にお話いただいた後、名古屋大学博士研究員の末松美咲による聖徳太子絵伝の絵解きが披露された。

会場では、延べ60名の参加者がお茶と共に絵解き文化の世界に触れ、楽しみながらの一時を過ごした。

（阿部泰郎 人文学研究科教授・センター長）

研究フォーラム

越境する絵ものがたり

2016年9月17日(土)・18日(日) 西尾市岩瀬文庫

2016年9月10日より11月6日まで、西尾市岩瀬文庫に於いて特別展「越境する絵ものがたり」(名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター・国文学研究資料館共催)が開催され、岩瀬文庫が有する豊富で貴重な奈良絵本・絵巻を中心に、岩瀬文庫本に関連する個人蔵の作品もあわせて出展された。この特別展は2007年に開催された「絵ものがたりファンタジア」展の第2弾にあたり、今回は「越境」をテーマに新たな切り口で絵ものがたりの魅力に迫るものとなった。

この特別展をより楽しんでもらうための企画として、科研基盤(S)の助成により、9月17日・18日の二日にわたって市民向けの研究フォーラムが開催された。両日とも、総合司会は石川透氏(慶應義塾大学)、コメンテーターは阿部泰郎氏(名古屋大学)が務めた。

初日の17日はまず「源氏の物語としての酒吞童子と王朝物語」と題して高橋亨氏(椋山女学園大学)による講演が行われた。『酒吞童子』は源頼光一行が大江山に住む鬼である酒吞童子を倒す物語であるが、「源氏」の物語という点で『源氏物語』とも共通する面を持つことを述べた。次に特別展のプロジェクトチームのメンバーによる「展覧会を楽しむ―「越境」ワンポイント講座」が行われた。阿部美香氏、筒井早苗氏、藤井奈都子氏、龍澤彩氏の4名がそれぞれ特別展に展示されている作品を取り上げ、どのような点で「越境」しているのかを解説し、作品の見どころを語った。最後に鹿谷祐子氏、船田淳一氏による研究報告



が行われた。鹿谷氏は『人間一代戯画』について、船田氏は『愛宕地蔵物語』について、それぞれ最新の知見を述べた。

18日は最初に「神代物語の兄弟現る!」と題して小林健二氏(国文学研究資料館)によるオープンレクチャーが行われた。『神代物語』とは海幸山幸の話をもとにした絵巻で、岩瀬文庫の有する絵巻がよく知られているが、その兄弟本が新出版として現れた。特別展では二本を並べて展示し、見比べができるようにしてあったが、その見どころについて語った。次に「姫君の育て方―御伽草子点景」と題して齋藤真麻理氏(国文学研究資料館)による講演が行われた。御伽草子に見える姫君と琵琶の関係に注目し、中世から近世にかけての望ましいとされた女性の生き方について述べた。最後に「特集『児今参り』研究報告―新発見の白描絵巻をめぐる」と題して、江口啓子氏、鹿谷祐子氏、服部友香氏、末松美咲氏による研究報告が行われた。『児今参り』は岩瀬文庫に奈良絵本として伝わる物語であるが、最近同じ物語が白描絵巻の形態で見つかった。ここでは、新発見の白描絵巻から『児今参り』について新たにわかったことを中心に最新の成果を報告した。

二日にわたって行われた研究フォーラムは盛況のうちに幕を閉じた。特別展をより楽しんでもらうためのさまざまな工夫を凝らした、充実した会となったと思う。また、最新の研究成果を地域の市民の皆様還元するよい機会となった。(江口啓子 人文学研究科博士課程後期課程)



国際研究集会 ● ソシュール『一般言語学講義』刊行100年記念

ソシュール、『講義』そしてわれわれ

Saussure, le *Cours* et nous. Colloque international à la mémoire du centenaire de la publication du *Cours de linguistique générale*

2016年12月17日(土)・18日(日) 名古屋大学文学部棟 127講義室

2016年12月17日・18日、人類文化遺産テキスト学研究中心主催の国際研究集会「ソシュール、『講義』そしてわれわれ」(コーディネーター、松澤和宏)が名古屋大学国際会議助成を得て、名古屋大学文学研究科127講義室にて開催され、3名の外国人招聘研究者を含む84名の参加を得て、フランス語、英語および日本語での講演と研究発表がなされ、活発な議論が交わされた。

ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』の刊行100年を記念した本研究集会は、テキスト学にとっては二重の意味で決定的とも言える重要性を持っている。第一に、ソシュールの提唱した恣意性の原理や体系としての言語という考え方は、記号論や構造主義、テキスト理論を生み、二十世紀の人文科学全般に多大な影響を与えたことは、今さら贅言を要しない。体系やテキストという概念は、眼前の多様な文字や記号の単なる集積ではなく、方法論的要請に基づいて構築された抽象的な学的対象である。このことを忘れてしまうと、テキスト学は既成のディシプリンの寄せ集めに堕してしまう恐れがある。こうした概念を梃子にしてこそ多種多様な言葉とテキストの森に分け入ることが可能となるだろう。第二に、ソシュールの名が冠せられている『一般言語学講義』は、師の死後に弟子たちによって執筆編纂された編著書であるために、ソシュール自身の草稿や聴講ノートとの間には看過できない相違があり、再解釈されるべき箇所が多々残されていることである。本文の生成と受容を問題にすることは、テキスト学の母胎であ

る文献学と解釈学の中心課題であり、この著書はテキスト学の格好の対象となる。『一般言語学講義』の本文を問題視することは、これまでに流布してきた種々の通説を吟味検討することにならざるをえず、この著書の影響下で展開されてきた20世紀の言語学や人文学を批判的に捉え直すことに繋がる。テキスト学の対象であると同時にテキスト学そのものの自己反省と新たな展開の契機(例えば構造主義的解釈の批判的克服)になると考えられるのである。

こうした問題意識のもとで、初日はソシュール学会会長(カラブリア大学・イタリア)のダニエル・ガンバララ教授が『一般言語学講義』への批判自体がこの著書に多くを負っているという逆説的擁護論を展開し、ルイ・ド・ソシュール教授(ヌーシャテル大学・スイス)が認知科学の観点から従来のラング概念を批判しつつ新たな『講義』読解を提示した。また近代テキスト草稿研究所(フランス)言語学班責任者のイレヌ・フノリオ女史は、文字の果たす役割についてソシュールを継承しつつ批判したバンヴェニストの考察を未刊行の草稿を紹介しつつ提示した。二日目は、松澤(名古屋大学)が恣意性の原理をめぐる通説を批判しつつ、ソシュールの記号の非対称的二重性を明らかにし、野村益寛教授(北海道大学)がソシュールと認知言語学者ラネカーとの間の継承と批判の関係について、宮原勇教授(名古屋大学)がソシュールの記号概念について自筆草稿や聴講ノートに基づいて現象学的見地から検討を加えた。また阿部宏教授(東北大学)は主観性の概念について、時枝誠記がソシュールの弟子バイイから受けた影響を指摘し、釘貫亨教授(名古屋大学)は記号の恣意性概念が文化論的推論を言語学的対象から除外することで、俗語や方言などへ観察対象を拡大したことなど、近代日本における言語研究にもたらしたものを考察した。

なお、ソシュール学会(ジュネーヴ)、近代テキスト草稿研究所(パリ)と連携した日本で唯一の企画であった本シンポジウムの記録は、松澤和宏編『21世紀のソシュール』(水声社)として今秋刊行される予定である。

(松澤和宏 人文学研究科教授)



東ジャワ州ヒンドゥー教史跡をめぐる連携プロジェクトの可能性と展望

2017年1月23日(月)～26日(木) インドネシア・スラバヤ大学

人類文化遺産テキスト学研究センター（以下、CHT）は、昨年に引き続き WPI-next（最先端国際研究ユニット）「文化遺産創成の記憶と力のテキスト学」の活動の一環として、インドネシア共和国東ジャワ州スラバヤ市の国立スラバヤ大学との学術交流を実施した（2017年1月23～26日）。本企画は、昨年同様に本学で博士号（日本語学）を取得したジョジョック・スパルジョ副学長をはじめ芸術言語研究科の皆様のご協力によって実現した。この企画のねらいは、主に東ジャワ歴史文化遺産のなかでもヒンドゥー教および仏教史跡に着目して、連携プロジェクトの可能性を模索することがねらいであった。本学からは、阿部泰郎・CHTセンター長を中心に、考古学・歴史学を専門とする教員4名（周藤芳幸、梶原義実、伊藤伸幸、市川彰）が参加した。

初日は、学長の表敬訪問と大学見学ののち、共同シンポジウムを開催した。共同シンポジウムでは、はじめに阿部・CHTセンター長がCHTの活動や今後の方向性について説明した。続いて、ギリシア考古学・歴史学（周藤）、日本考古学・歴史学（梶原）、メソアメリカ考古学（伊藤、市川）の立場から、本学教員が研究紹介をおこなった。スパルジョ副学長をはじめ、東ジャワの歴史文化遺産に詳しい考古学者ヨハネス・ハナン氏らが同席し、活発な意見交換がおこなわれた。

二日目・三日目には、史跡見学をおこなった。二日目はスラバヤ市の南西に位置し、マジャパイト王国（13世紀末～15世紀末）の都が置かれたトゥロラン史跡群（寺院、沐浴場、住居群、門など）と博物館を、三日目はスラバヤ市の南に位置し、マジャパイト王国以前に東ジャワで栄え



たシンゴサリ王国に関連する史跡などを見学した。ハナン氏の案内のもと二日間で計12の史跡と博物館を見学する機会に恵まれ、内容の濃い二日間となった。

見学した記念碑的建造物はしっかり復元がなされている他、住居群は広範囲に覆い屋根で保護され、発掘調査で発見された遺構がそのまま展示されていた。一般的には、記念碑的建造物の保護に傾倒しがちだが、人々の生活の様子がわかる住居群を保護し、一般公開しているところに、インドネシアの史跡保護に対する意識の高さをうかがい知ることができた。

インドネシアは日本同様に地震国でもある。地震などによる倒壊に備えて、建築や石像などの3Dデータの記録が重要になるだろう。また、史跡では、記念碑的建造物の四面を飾るレリーフ、博物館には未解読の碑文が刻まれた多くの石碑が保管されていた。ハナン氏らによれば、マジャパイト王国関連史跡には、ヒンドゥー教徒の多いバリ島から今でも参拝者があるという。このことから、レリーフの研究や碑文の解読が進めば、当該地域の史跡はインドネシアのヒンドゥー教徒の父祖の地としてもさらに重要視されていこうと想像する。

最終日は、マジャパイト・ホテル（旧・大和ホテル）、サンプルナ博物館（通称、タバコ博物館）、独立記念塔などの歴史的施設を見学し、インドネシア近現代史を学ぶ貴重な機会となった。

最後に、短期間で数多くの歴史文化遺産を巡ることができたのは、ひとえに忙しい仕事の合間を縫って案内をしてくださった国立スラバヤ大学芸術言語研究科の皆様のおかげである。この場をお借りして深謝申し上げたい。昨年と本年の学術交流を契機として、国立スラバヤ大学と名古屋大学の連携が強化され、文化遺産をめぐる連携プロジェクトが本格化していくことを期待したい。

（市川 彰 人文学研究科特任助教）



国際シンポジウム ● 慶應義塾大学・ハイデルベルク大学共催

写本と版本

New Insights into Manuscripts and Printed Books in Early-Modern Japan

2017年3月8日(木)・9日(金) ドイツ・ハイデルベルク大学

人類文化遺産をめぐるさまざまな調査や発見を国際的に広く共有することを目指したCHTの取り組みの一環として、図像アーカイブスとしての絵巻・絵本・絵伝などの領域においては、2017年3月8日から9日にかけて、名古屋大学の阿部泰郎教授、慶應義塾大学の石川透教授、ドイツ、ハイデルベルク大学のメラニー・トレーデ教授の協同により、ハイデルベルク大学カール・ヤスパース・トランスカルチャー高等研究センターにて国際シンポジウム「写本と版本」が開催された。ドイツにおける研究拠点形成事業として、クラスター・オブ・エクセレンス「グローバル・コンテキストにおけるアジアとヨーロッパ」プロジェクトを推進されるメラニー教授のお力添えにより、2016年にもハイデルベルク大学と名古屋大学との間では国際研究交流が実現している。

初日は、ロシアで昨年発見された浅井了意の『長恨歌絵巻』断簡に関する石川教授（慶應大学）の研究報告をはじめ、慶應大学の屋名池誠教授（「岐路に立つ仮名一かなづかい以前の仮名表記」）、国文学研究資料館の神作研一教授（「古義堂の歌人一恵藤一雄について」）、慶應大学の佐々木孝浩教授（「平仮名古活字版の仕立てについて」）、ハンブルク大学のベレニス・メラニー氏（「国立国会図書館蔵「ゆや」の絵入り写本の制作年代をめぐって」）、国文学研究資料館の恋田知子助教（「江戸初期における仮名法語の開版と物語草紙」）により、近世日本における写本と版本をめぐる調査・研究の報告が行われた。議論の締めくくりとして、ハイデルベルク大学のユーディット・アロカイ教授は、「写本と版本—メディアの作者と読者への影響」と題した研究発表の中で、写本と版本の機能的差異に焦点を当てた問題を提起され、参加した研究者らによって活発な意見交換が行われた。



二日目には引き続き、上記のテーマのもと各専門分野の研究者によって報告がなされ、考察がさらに深め

られた。『融通念仏縁起絵巻』における写本と版本を対象とした阿部美香研究員（東京大学）、鴨長明の和歌を取り上げた浅見

和彦名誉教授（成蹊大学）、『大織冠』写本に焦点を当てたメラニー教授（ハイデルベルク大学）、江戸廻花也の狂歌摺物に関する津田真弓教授（慶應大学）、ベルリン国立図書館が所蔵する江戸・明治期の「書袋」を例にとったキリストヤン・デュンケル氏による議論はそれぞれ、各研究領域における最新の成果報告となり、聴衆を巻き込んだ新鮮な討議の場を提供した。また他方で、ハイデルベルク大学との間で昨年開催された国際シンポジウムのテーマ「中世日本とヨーロッパにおける聖なるもののイメージとマテリアリティ」を継承するかたちで、木俣元一教授（名古屋大学）が『ホルトゥス・デリキアールム』写本とストラスブル大聖堂の展示プログラムとの関連について、百合草が中世写本挿絵とパルマ大聖堂装飾の観者に共通する視覚経験について報告を行った。このセッションでは、それぞれの分野を越えて、宗教造形という観点から、西洋／日本の信仰や価値観について意見が交わされた。

初春の明るい陽射しが降りそそぐ会場の一角で、ディスカッションの合間には、伊藤信博助教（名古屋大学）を中心とする専門の先生方によって絵巻の取り扱い方が解説された。複製の絵巻物に触れたドイツ人学生は目を輝かせて、日本への憧れを語ってくれた。シンポジウム終了後には、シュトゥットガルトのバーデン・ヴュルテンベルク州立リンデン博物館を訪れ、ベルツ・コレクションの調査を行った。そこで実見に基づく新たな知見を得られたことも、今回の大きな収穫である。全体として、絵巻・絵本・絵伝を主とした文字／視覚テキストに多様な方向からアプローチし、その生成や意義について改めて考えさせられる非常に内容の濃い三日間となった。

（百合草真理子 人文学研究科特任助教）



国際ワークショップ ● ハーバード大学・国文学研究資料館共催

中世美術と絵巻の宗教空間

2017年3月24日(金)・25日(土) アメリカ・ハーバード大学 イェンチン研究所

2017年3月24日・25日、ハーバード大学イェンチン研究所にて、ワークショップ「中世美術と絵巻の宗教空間」が開催された。このワークショップは、ハーバード大学美術館所蔵の聖徳太子二歳像をめぐる共同研究ワークショップとして開かれたものである。ハーバード大学にセジウィック夫妻コレクションとして寄託される聖徳太子二歳像は、制作年代が明らかな南無仏太子像としては最古の傑作であり、その胎内に膨大な宗教テキストを納めていることでも知られている。今回のワークショップでは、ハーバード大学における最新の研究結果と、日本の研究者による調査研究結果の交流が図られた。

まず24日に、ハーバード大学美術館において、聖徳太子二歳像とその胎内納入品、および美術館に所蔵される中世日本の宗教テキストの調査が行われた。また、昼食時にはランチトークの形式で、ハーバード大学大学院生4名(JUSTIN-JUNICH, Leah氏、BORENGASSER, DANIEL氏、QIN, Yuxin氏、LEFEBVRE, Jesse氏)による、聖徳太子二歳像に関する報告がなされた。この報告は、2016年度前期のセミナーで、各々が聖徳太子二歳像胎内納入テキストの解読に取り組んだレポートをもとにしたものであり、それぞれ胎内納入品の個別のテキストを取り上げ、その内容を精緻に分析するものであった。

さらに25日には、11名の研究者が4つのパネルに分かれ、ハーバード美術館聖徳太子二歳像の研究を中心に据えながら、その隣接分野を含めた研究報告を行った。パネル1では、「中世仏教の宗教空間と美術」というテーマで、郭佳寧氏(名古屋大学大学院生)が覚鑿の毘沙門天信仰について、猪瀬千尋氏(名古屋大学 CHT 研究員)が吒呌尼の図像について、瀬谷貴之氏(神奈川県立金沢文庫)が聖徳太子と舎利信仰について、それぞれ報告を行った。この



パネルでは、名古屋大学准教授で、当時イェンチン研究所の Visiting Scholar であった近本謙介氏が司会をつとめ、海野圭介氏(国文学研究資料館)のコメントがあった。

続くパネル2では、阿部龍一氏(ハーバード大学教授)を司会として、「聖徳太子二歳像胎内納入品の宗教空間」のテーマのもと、レイチェル・サンダース氏(ハーバード大学美術館)、阿部泰郎氏(名古屋大学教授)、近本謙介氏、瀬谷愛氏(東京国立博物館)が、聖徳太子二歳像および胎内納入品をめぐる宗教世界について報告を行い、ケビン・カー氏(ミシガン大学)がコメントした。

さらにパネル3では、「『ちごいま参り』絵巻の物語空間」というテーマで、ハーバード大学のメリッサ・マコーミック氏を司会として、末松美咲(名古屋大学博士研究員)と服部友香氏(名古屋大学教育学部附属高等学校非常勤講師)が『ちごいま参り物語』絵巻についての報告を行い、齋藤真麻理氏(国文学研究資料館)からのコメントがあった。

最後に、パネル4では、ハーバード大学美術館に下巻が収められる『因果業鏡図』絵巻をめぐる、「『因果業鏡図』絵巻の宗教空間」のテーマで阿部美香氏(東京大学史料編纂所特任研究員)、恋田知子氏(国文学研究資料館)が報告を行った。ここでは、司会を小林健二氏(国文学研究資料館)が務め、山本聡美氏(共立女子大学)がコメントをした。

研究報告では、宗教学、美術史学、文学研究など各領域を横断しながら、日本研究者と海外研究者からの活発な議論がなされ、国際的・学際的研究交流の場として非常に充実したものとなった。殊にハーバード大学の大学院生による聖徳太子二歳像胎内納入テキストの研究報告は、今後の宗教テキストをめぐる日米共同研究の可能性を期待させるものであり、今回のワークショップはそうした研究交流の第一歩として大きな意義があったことが感じられた。

(末松美咲 人文学研究科博士研究員)



2016年度研究活動

国際研究集会／研究会議／シンポジウム／フォーラム

国際研究会議

コレージュ・ド・フランス合同国際研究会議

宗教テキストとしての論義と宗論

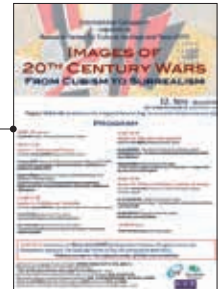
2016年7月19日(日) 名古屋大学文学部棟 大会議室

国際研究集会

IMAGES OF 20TH CENTURY WARS FROM CUBISM TO SURREALISM

(後援：日仏美術学会 支援：科研費 若手研究 (B)「20世紀前半のフランス前衛美術におけるレアリスムとふたつの戦争」代表者：松井裕美)

2016年11月12日(土)10:00-18:00 名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



国際シンポジウム

『一般言語学講義』刊行100年記念国際シンポジウム

ソシユール、『講義』そしてわれわれ

名古屋大学国際会議助成

2016年12月17日(土)13:30-17:30・18日(日)10:00-15:00 名古屋大学文学部棟 127講義室

P.8参照



国際シンポジウム

P.10参照

写本と版本

New Insights into Manuscripts and Printed Books in Early-Modern Japan

2017年3月8日(水)・9日(木) ドイツ・ハイデルベルク大学

国際フォーラム

Religious space, ritual and memory (宗教空間・儀礼・記憶)

(主催：名古屋大学大学院国際言語文化研究科 共催：名古屋大学 CHT)

名古屋大学国際会議助成

2017年2月4日(土)13:00-16:30・5日(日)10:30-18:00

名古屋大学文系総合館 カンファレンスホール



公開研究集会

「法楽」の宗教空間

2016年11月5日(土)13:00-17:30・6日(日)10:00-15:00 名古屋大学文学部棟 大会議室

公開フォーラム

安城絵解きフォーラム 聖徳太子絵伝と日本の絵解き文化

2016年10月9日(日)15:00-16:30 安城市歴史博物館 エントランスホール



公開フォーラム

P.7参照

研究フォーラム 越境する絵ものがたり

(共催：岩瀬文庫・国文学研究資料館)

2016年9月17日(土)13:00-16:30・18日(日)11:00-16:30 西尾市岩瀬文庫 研修ホール



展覧会協力

西尾市岩瀬文庫「越境する絵ものがたり」

2016年9月10日(土)ー11月6日(日)

講演会

17世紀フランスにおける宗教とテキスト

ジャン＝レイモン・ファンロー [エクス＝マルセイユ大学]
2016年4月22日(金)13:30-14:30 名古屋大学文学部棟 130会議室



巡礼の考古学——スーダンのキリスト教化を媒介として

坂本 翼 [リール第三大学]
2016年7月1日(金)16:00-18:00 名古屋大学文学部棟 130会議室



韓国における仏教関連の世界記憶遺産とその知的持続可能性

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

金 鐘明 [韓国学中央研究院]
2016年7月18日(月)15:00-17:00 名古屋大学文学部棟 大会議室

P.6参照



ニューヨークから見た東アジアのなかの日本美術

渡辺雅子 [元メトロポリタン美術館主任研究員]
2016年8月8日(月)15:00-16:30 名古屋大学文学部棟 大会議室



『仏法大明録』と円爾

曹景恵 [台湾大学]
▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」
2016年9月23日(金)15:00-16:30 名古屋大学文学部棟 大会議室

麗気記の実験的神学 神言説における存在論、記号論および救済論

ファビオ・ランベッリ [カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校]
2016年10月14日(金)10:30-12:00 名古屋大学文学部棟 大会議室



言語文化規範としての日本の聖語制 (共催：名古屋大学高等研究院)

ジャン・ノエル・ロベール [コレージュ・ド・フランス教授/フランス碑文・文芸アカデミー会員]
2016年11月16日(火)17:30-18:30 名古屋大学文学部棟 大会議室

アテナイ人と彼らの女神——パルテノン神殿における女神アテナの表現について

マリオン・マイヤー [ウィーン大学古典考古学研究所]
2016年11月29日(火)16:30-18:30 名古屋大学文学部棟 大会議室



セミナー

ギリシア碑文セミナー —— ニュースレターNo.2参照

アングロス・マッセウ [ギリシア碑文学協会]
2016年9月4日(日)11:00-14:00 ギリシャ・アテネ碑文博物館

F for Foax 美術史の／における贋造

ヘンリ・キーゾル [ハイデルベルク大学]
2016年9月7日(火)14:00-16:30 名古屋大学文学部棟 131講義室



センター紀要『HERITEX 2』掲載

ヤン・アスマン著/安川晴基訳 エジプト人モーセ——ある記憶痕跡の解釈をめぐって

講師 安川晴基 [名古屋大学文学研究科准教授] コメントーター 周藤芳幸 [名古屋大学]

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

2017年2月24日(金)18:00-19:00 名古屋大学文学部棟 130講義室



国際ワークショップ

中世美術と絵巻の宗教空間

P.11参照

2017年3月24日(金)・25日(土) アメリカ・ハーバード大学イエンチン研究所



ハーバード大学美術館HPより引用
http://www.harvardartmuseums.org

研究活動

国際研究交流会

P.9参照

東ジャワ・ヒンドゥー文化遺産をめぐる国際ワークショップ

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

2017年1月23日(月)ー26日(木) インドネシア・スラバヤ大学

展覧会協力

聖徳太子絵伝模写完成記念特別展

「まねる うつす つたえる」

2016年9月24日(土)ー11月6日(日) 安城市歴史博物館



報告書

岩瀬文庫研究フォーラム「絵ものがたりファンタジアII」プロジェクトチーム

『越境する絵ものがたり』

(阿部泰郎・阿部美香編、2016年9月)



六所家総合調査だより特別号

『護持院隆光と東泉院精海』

(富士山かぐや姫ミュージアム編、2017年3月)



『中世における儀礼テキストの総合的研究』

—館蔵田中旧蔵文書『転法輪鈔』を中心として—

国立歴史民俗博物館研究報告書 第188集

(国立歴史民俗博物館、2017年3月)



2017年度研究活動

公開シンポジウム

古代エジプトにおける在地社会とネットワーク

P.5参照

竹尾美里 [中京大学] 「西洋古代史研究とネットワーク理論」

平野みか [名古屋大学大学院] 「ヘレニズム時代以前の異文化との接触—アマルナ出土のミケーネ土器について」

菊地のどか [名古屋大学大学院]

「ファイユームの在地社会における「村の書記」アノシスとそのネットワーク」

石田真衣 [日本学術振興会特別研究員] 「プトレマイオス朝期エジプトの嘆願と紛争処理」

西本真一 [日本工業大学] 「アコリスの石切場調査と第一アナスタシ・パピルス」

和田浩一郎 [國學院大学] 「王朝時代の集落内埋葬について」

花坂 哲 [古代オリエント博物館] 「サンダルからクツへ—皮革製履物の形態変化と外国の影響」

【総合討論】川西宏幸 [筑波大学]

2017年4月22日(土)13:00-18:00 名古屋大学文学部棟 127講義室



公開講演会

幸福のために生きること——アリストテレスの場合

講師 オイヴィン・ラッバス [オスロ大学]

2017年5月23日(火)16:30-18:00 名古屋大学文学部棟 127講義室



ルネサンスにおける古代の記憶から古典主義創出へ

講師 小佐野重利 [東京大学]

2017年7月22日(土)14:00-16:00 名古屋大学文学部棟 127講義室



公開セミナー

文観房弘真が織りなしたテキストの地平

——智積院智山文庫所蔵『御遺告七箇大事』と『御遺告大事』の検討を中心に

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

講師 ラポー・ガエタン [ハーバード大学 GSAS]

司会 阿部泰郎 [名古屋大学]

コメンテーター 伊藤 聡 [茨城大学]

2017年5月13日(土)9:30-12:00 名古屋大学文学部棟 大会議室



プナタラン遺跡の浮彫壁画の世界——国立スラバヤ大学との共同研究から

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

講師 野沢暁子 [名古屋大学]

ヨハネス・ハナン・パムンカス教授 [国立スラバヤ大学]

バンバン・スギト・サムスリ教授 [国立スラバヤ大学]

2017年7月10日(月)16:00-18:00 名古屋大学文学部棟 130講義室



古代の予兆とサウンド・スケープ

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

講師 マイケル・コモ [コロンビア大学]

2017年7月18日(火)16:30-18:00 名古屋大学文学部棟 共同2B講義室



公開フォーラム

2017年金沢大学 CCRS・名古屋大学 CHT 研究連携協定締結記念

金沢絵解きフォーラム——北陸の絵解き文化を探る

▶ グローバル展開プログラム「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」

【第1部】「アジアと日本の絵解き文化遺産——北陸の絵解き文化をめぐって」

パネリスト 森 雅秀 [金沢大学] 福江 充 [北陸大学]

【第2部】「砺波における聖徳太子伝の絵解き文化」

阿部泰郎 [名古屋大学] 大村 忍 [伝栄寺]

2017年7月21日(金)10:00-16:00 金沢大学 サテライト・プラザ (第1部)、旧園邸・松向庵 (第2部)



国際ワークショップ

文化遺産としてのアーカイヴス Archives as Cultural Heritage

▶ WPI-next ユニット「文化遺産創成と記憶の力のテキスト学」

JSPS 研究拠点形成事業 Core-to-Core Program「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」

2017年6月2日(金) オーストリア・科学アカデミーアジア文化・思想史研究所

P.4参照

通年の基盤的調査と研究連携

「真福寺大須文庫調査研究会」の活動支援

重要文化財一括指定のための悉皆調査・データ入力・デジタル画像化の実施

『中世禅籍叢刊』編集・公刊のための調査・研究

「勸修寺聖教文書調査団」の活動支援

重要文化財一括指定のための聖教目録作成

人間文化研究機構との共同研究

「利島の祈り—日本・儀礼テキストの世界」展示企画立案と共同研究（2015～18）

「花祭アーカイヴス」構築の活動支援

奥三河花祭資料伝承者・所蔵機関への現地調査・デジタル画像化

刊行本の紹介

定期刊行物

HERITEX vol.2

2017年9月

人類文化遺産テキスト学研究中心（CHT）は、人類にとってかけがえない文化の遺産すべてをテキストとしてとらえ、アーカイブス・物質文化・視角文化の3つの視角を軸に、創造や意義をテキストとして読み解く統合テキスト学の知見より、人文学研究の新たなステージを目指す研究機関である。本誌はCHTが主体となった研究活動の成果や、関連・連携する諸機関や研究者の人類文化遺産をめぐるさまざまな調査や発見についての速報を、広く紹介するものである。



学術研究資料集

中世禅籍叢刊

中世禅籍叢刊編集委員会（阿部泰郎ほか）編
臨川書店

第4巻 聖一派

2016年7月 総680ページ

第7巻 禅教交渉論

2016年10月 総712ページ

第10巻 稀観禅籍集

2017年8月 総704ページ

第11巻 聖一派 続

2017年1月 総672ページ

『中世禅籍叢刊』は、真福寺と金沢文庫を中心とした日本の寺院・文庫に所蔵されている貴重な禅に関する書物の本文を影印・翻刻により示し、それに解題を付して紹介する叢書である。CHTの全面的な協力のもとで、2013年から臨川書店より刊行が続けられており、2016、17年度には『聖一派』『禅教交渉論』『聖一派 続』『稀観禅籍集』の4冊が上梓された。いずれも日本における禅宗の思想やその位置づけについて再考を促す書物が紹介されており、禅宗史さらには日本仏教史の研究には必携である。



一般書籍・図録等

西洋美術の歴史 3 中世Ⅱ

ロマネスクとゴシックの宇宙

木俣元一・小池寿子著

中央公論新社 2017年3月 600ページ

ヨーロッパ中世の後半に相当するロマネスクとゴシックの美術について、従来の発展史的な観点からその歴史を叙述するのではなく、歴史／物語、まなざし、祈り、物質、死生観、煉獄の形成と死者のための祈り、身体と靈魂、死後世界への旅といった諸テーマに基づいて、中世美術を理解する基本的枠組を提示し、もともとの歴史的な環境に戻し、そこでどのように見られ受けとめられていたのかを再構成しようとする概説の試みである。



豊田市史研究特別号 猿投神社の典籍

新修豊田市史編さん専門委員会編／阿部泰郎監修

豊田市 2016年3月 142ページ

西三河の古社、猿投神社に伝来する漢籍（国指定重要文化財）と図書（愛知県指定文化財）からなる古典籍、および旧神宮寺の聖教等のテキスト遺産の全体像を収録し紹介する。CHTが全面協力した新修豊田市史編さん事業の最新の成果が盛り込まれると共に、全てのアーカイブ化の手引きともなる図録として編集した。

